國際會議情報 —

第4回中國域外漢籍學術國際會議

福　井　文　雅

この會議（英語では，The Fouth International Conference on Works in Chinese Outside of China）は，ハワイ大學の韓國研究センター the Center for Korean Studies of University of Hawaii（所長：Suh Dae-Sook 徐大肅）と，臺灣の聯合報・國學學獻館 the Center for Chinese Studies Materials of United Daily News Cultural Foundation（館長：Ch'en Chieh-hsien 陳捷先）との共同主催で，1989年7月1日から4日まで，アメリカ合衆國ハワイのホノルル Honolulu 市（中國語の音譯では，北奴魯魯。別稱，檀香山）で開催された。宿舍も会場も，Outrigger Prince Kuhio Hotel ホテルであった。

參加者の殆どは1日に到着したが，時差ボケを避ける爲に，私は蘆田孝昭教授と共に前日に行っていた。

會議日程は，1日夜の Dynasty Hotel での歡迎宴會から始まった。ホスト役は，北米事務協調委員會・駐ホノルル辦事所所長の左紀國 Paul J. K. Tso 氏夫妻であった（夫人の左馬秋壬女史は，前中華民國駐日代表馬紀壯氏の息女）。翌2日午前中は，中華民國優良出版品の展覽會の開會式に出席した。このホノルルでの展覽會を第一回として，全米に中華民國優良出版品の巡回展覽會を繰り廣げる計畫だそうである。この會の後，ハワイ大學やパール・ハーバーなどの名勝をマイクロ・バスで觀光した。

3日9時からの學會開會式には，去年の主催校であった韓國・建國大學校から，劉承潤理事長と韓相基祕書室長も出席された。次に，會議の進行表を轉載しよう。發表時間は20分，討論5分。用語は，例の如く，英語・中國語が中心で，韓國語・日本語でも許された。

7月3日（月）

9時～9時30分　開幕典禮（徐大肅教授）

貴賓致詞

9時40分～12時30分　第1次會議

司會：徐大肅（ハワイ大學）

發表者：

吳哲夫(故宮博物院)：四庫全書著錄的中國域外圖書

申福龍(建國大學)：在圓仁的『入唐求法巡禮記』中有關新羅關係記錄及其誤見

宋　晞(文化大學)：朝鮮黃景源的宋代諸帝論

陳捷先(臺灣大學)：黎崱『安南志略』研究

11時～11時15分　休息

金在先(圓光大學)：明弘治年間南北水陸驛路，驛站及其沿途之衞所——以崔溥『漂海錄』爲中心

陳三井(中央研究院)：阮述『往津日記』在近代史研究上的價値

11時55分～12時30分　綜合討論

12時30分～14時30分　午餐休息

14時30分～15時50分　第2次會議

司會：福井文雅（早稻田大學）

發表者：

柳鐸一(釜山大學)：『三國志演義』流傳韓國年代考

沈隅俊(中央大學)：流傳日本的朝鮮坊子本『歷代將鑑博議』內賜本

鄭棵生(淡江大學)：佚存日本的朱中丞『甔餘雜集』

中村璋八(駒澤大學)：吉田文庫本『雜書拔書』考

松原孝俊(神田外語大學)：關於朝鮮的歲時記和中國的歲時記

15時50分～16時20分　綜合討論

16時20分～16時40分　休息

16時40分～18時　第３次會議

司會：宋　晞（文化大學）

發表者：

菅野裕臣（東京外語大學）：朝鮮時代中國漢字音的系譜

林東錫（建國大學）：朝鮮時代漢語教材類的表音研究

辛勝夏（高麗大學）：論韓國識字教科書的漢籍課本
——以丁若鏞的『兒學編』爲主

洪瑀欽（嶺南大學）：新發現的慶北迎日郡冷水里新羅古碑文識讀概況

18時～18時30分　綜合討論

7月4日（火）

9時～10時20分　第４次會議

司會：陳捷先（臺灣大學）

發表者：

H. W. KANG & Edward SHULTZ (University of Hawaii): "Koryŏsa segye as a historical source"

Mitsugu SAKIHARA (University of Hawaii): "Chinese sources in Ryukyu: a preliminary study"

Truong Buu LAM (University of Hawaii): "Early 20th century patriotic Vietnamese literature written in Chinese"

10時20分～10時40分　綜合討論

10時40分～10時50分　休息

10時50分～12時10分　第５次會議

司會：町田三郎（九州大學）

發表者：

黃元九(延世大學)：論『板尾洞故事』

丁奎福(高麗大學)：彰善感義錄與冤感錄・花珍傳之相關性

成澤勝(神田外語大學)：論栗谷對『孟子集註』的處理

全海宗(仁荷大學)：關於『魏略』和『翰苑』的若干考究

12時10分～12時30分　綜合討論

12時30分～14時30分　午餐休息

14時30分～15時50分　第 6 次會議

司會：金三龍（圓光大學）

發表者：

蘆田孝昭(早稻田大學)：元明刊本管窺

町田三郎(九州大學)：關於島田篁村

笠　征(福岡大學)：九州儒學家——龜井昭陽的生平及其學問

連清吉(九州大學)：日本江戶時代以來考證學派的考據方法

15時50分～16時20分　綜合討論

16時20分～16時40分　休息

16時40分～18時30分　第 7 次會議

司會：黃元九（延世大學）

發表者：

王民信(臺灣大學)：朝鮮重刻四卷本『唐詩鼓吹』

黃啓方(臺灣大學)：從『金華詩話記』看安南黎朝的漢詩發展

福井文雅(早稻田大學)：發現於敦煌木牌上的般若心經

柳炳德(圓光大學)：『圓相牧牛圖』在韓國的流傳

野口善敬(九州大學)：晦山戒顯與『靈隱晦山顯和尚全集』

18時30分　　綜合討論

18時50分　　閉幕典禮（陳捷先教授）

閉會式では，韓國代表團の中から全海宗教授が，日本側からは私が當てられて謝辭を述べた。毎度の事なので，今回は是非とも他の日本代表を當てて呉れるように，司會者には前もって依頼しておいたのであるが，この結果で，（本誌前號にも書いたように）私には決して樂しい仕事ではない。アメリカでの會議であることを考慮して，謝辭を英語で先ず述べ，その後に，同じ趣旨を簡單に中國語で繰り返した。次回は，1990年８月９日から12日まで，アメリカのロス・アンジェルス市で開催の豫定であるが，今度こそ，誰か他の日本の方が私に代って挨拶をして下さることを，今から望んでやまない。

「東アジア比較研究」

文部省の科研費・重點領域研究の一つに，三年越しの表記の一大プロジェクトがある。正確には「東アジアの經済的・社會的發展と近代化に關する比較研究」と言う。代表者は中嶋嶺雄教授であり，事務局は東京外國語大學の國際關係論研究室に置かれている。個別の研究班の中に，加地伸行大阪大學教授が代表される「儒教文化圏の歴史と社會」班があり，その構成員は次の方々であった。

加地伸行　今堀誠二　鈴木修次　小林文男　阿部洋　河田悌一　古田博司

そこへ，私が去年から加えられ，1989年９月15日～17日の間，神奈川縣大磯のプリンス・ホテルでの第三回全體會議に出席することになった。加地伸行教授を中心にして，長文の報告が纏められている最中であるが，とりあえず，私が會議の狀況を簡單に書くことにしたい。

日程は次のようであった。

９月15日（金）

13:00～14:00　　受付・チェックイン

15:00～16:00　　Opening Ceremony

開會の辭　渡邊利夫（東京工業大學）

來賓挨拶／文部省代表挨拶

Session (1)

16:00～16:45　招待講演　司會：松本三郎（慶應大學）

Prof. Léon Vandermeersch（パリ大學）

「中國の『第五次現代化運動』」

"The 5th. Modernization in China"

16:45～17:00　Coffee Break

17:00～18:00　ディスカッサント：福井文雅（早稻田大學）

：川本邦衞（慶應大學）

：阮章收（グエン　チュオン　タウ）

（ヴェトナム社會科學委員會史學院教授〈慶應大學訪問教授〉）

18:00～18:50　Discussion

19:00～20:30　夕　食

20:30～21:30　平成元年度第二回總括班會議

9月16日（土）

Session (2)

9:30～10:15　招待講演　司會：安場保吉（大阪大學）

Prof. Ronald P. Dore (Imperial College)

「東アジアの經濟的・社會的發展と儒教文化」

"Economic and Social Development in East Asia and Confucian Culture"

10:15～10:30　Coffee Break

10:30～11:10　ディスカッサント：姜成求（カン　ソン　ク）

（韓國文化放送理事〈東京大學東洋文化研究所客員研究員〉）

：飯田經夫（國際日本文化研究センター）

11:10～12:00　Discussion

12:00～13:00　晝　食

Session (3)

16:00～16:45　招待講演　司會：源　了圓（ICU）

Prof. Wm. Theodore de Bary（コロンビア大學）

「中國における自由の傳統」

"Liberal Tradition in China"

16:45～17:00　Coffee Break

17:00～17:40　ディスカッサント：加地伸行（大阪大學）

：河田悌一（關西大學）

17:40～18:30　Discussion

18:30～20:30　夕食・懇親會

9月17日（日）

Session (4)

9:30～10:15　招待講演　司會：岡部達味（東京都立大學）

Dr. 李炯才（リー　クーン　チョイ）

（UIC 華米コーポレーション總支配人〈前駐日シンガポール大使〉）

「社會的・經済的發展と華人意識」

"Social and Economic Development and Chinese Identity"

10:15～10:30　Coffee Break

10:30～11:10　ディスカッサント：田中恭子（中部大學）

：今富正己（東洋大學）

11:10～12:00　Discussion

12:00～13:00　晝　食

總括 Session

14:00～14:30　全員討論

パネラー：江頭　數馬（日本大學）

：原　洋之介（東東大學）

：中兼和津次（一橋大學）

14:30～15:30　　總　　括　中嶋嶺雄（東京外國語大學）

15:30～16:00　　閉會の辭　猪口　孝（東京大學）

1

私の第一の役目は，日程冒頭のヴァンデルメルシュ教授の發表に對して，コメントすることであった。當初，教授の著書『アジア文化圏の時代』が豫定のテーマで，プログラムにもその題名があったので私は引き受けていたのであるが，開會間際になってテーマが變更になってしまった。この著書の中では，漢字がアジアの近代化を阻害したとする從來の意見に教授は反對して，マルチネの言語分析理論に據りつつ，漢字のお蔭で漢字文化圏での最近の興隆があった，と分析し，漢字も含めて，儒教文化の肯定的面を示そうとしていた。私自身も，マルチネの第1次分節・第2次分節の言語理論を昔讀み，それを應用して漢語の特質を考えたことがあったので，そういう話であれば私でもディスカッサントは勤まるであろう，と思ってその役は引き受けていたのであった。

ところが，それが急に The "5th. Modernisation" in China（中國の『第五次現代化運動』）と言うテーマに變更になった。これでは私はミスキャスト，とは思ったものの，もはや時間が迫り，學會事務局からは，英文に譯した氏の膨大な論文が送って來られてもしまって，已むを得ず引き受けざるを得なかった。專門外でも，また膨大な原稿量であっても，要旨に纏めて問題點を發表するだけならば，さして困難ではあるまい，と實は私は高をくくっていたのであったが，讀み始めてみると，この英文が希代の惡文であって，引き受けたことを更に後悔した。フランス語をそのまま轉載したような，つまり，英語辭書には出てこない語も數々あったり，構文がフランス的であったりで，フランス語の判らぬ人には讀解出來ない，と言っても過言ではない難解な英文なのである。この會議には，サイマルから實に優れた同時通譯の方々が働いていたが，彼女達ですら卽座の通譯は手こずり，私の譯文を參考された程である。後になって，その原文のフランス文を見せて貰ったが，これの方が遙かに判りやすく，惡い

飜譯英文と苦闘して，短時日に內容を纏めなければならなかった苦勞が，本會議についての先ず第一の印象である。

さて私は，先ずレオン・ヴァンデルメルシュ Léon VANDERMEERSCH 教授の紹介から始めた。それを後で纏めて會議事務局に提出したので，その文を次に轉載しておく。

教授は，パリ大學法學部を卒業して，法學博士號を取得の後，中國學に轉身。ヴェトナム（ハノイ）のフランス極東學院や日本（主に，京都），香港に長期間留學して，主に中國の法家，法律思想，中國古代文化を研究。著書には，文學博士號取得の『法家の形成』や『王道』上・下（スタニスラス・ジュリヤン賞受賞作品）*Le Monde sinisé*（『中國化した新世界』，福鎌忠恕氏の邦譯では『アジア文化圏の時代』，大修館書店）その他があり，古代中國ばかりでなく *Esprit*（『エスプリ』）等の一般誌へ現代中國問題についての寄稿も多い。日本中國學會會員・日本道教學會理事。日佛會館・前學長。L'Ecole Pratique des Hautes Etudes, 5ème Section（フランス國立高等研究院第五部門。日本の制度に當てはめて意譯すれば，「パリ大學大學院・宗教研究科」）教授。〔但し，この會議後，Directeur de l'Ecole française d'Extrême-Orient（フランス・極東學院院長）に任ぜられている。この學院は，フランス東洋學の中樞の研究機關であり，教授の任務は極めて重い。〕

教授の講演原稿には，前述のように苦勞して作成した私の飜譯があるが，ここでは紙數の關係上，全文は載せられない。會場では發表要旨と問題點とを私は紹介し，後に議事錄用にそのまた要旨を作ったので，次にそれを轉載するに止めたい———

教授は1989年春の天安門事件について，三節に分けてその原因と中國的特色を述べている。第一節では，二重貨幣制度などの經濟的困難を列擧しながらも，あの事件の發生原因について，當時の經濟秩序の惡化の影響を過大視してはならない，とする。あの狀況は「第四次現代化運動」の結末の危機ではなく，魏京生の言う「第五次現代化運動」の始まる盛り上がりの結果だ，と言うのである。第二節では，毛澤東以後の民主化運動は文化大革命の終りに芽生えたが，それは，革命の暴力を排除しようとする點でそれまでの民主化運動と違う，と指摘

する。最後の第三節では，あの鎭壓はデモ隊の順法鬪爭を無視したものであり，戒嚴令の布告方法は完全に憲法違反であった，たとえ政府の勝利と言えるとしても，支拂った代價と比べれば，それは「ピュロスの勝利（紀元前279年に，ギリシアの王ピュロスが多大の犧牲を拂って，ローマ軍から得た勝利)」と呼べるのではないだろうか？　と，結論している。

教授に對しては，「戒嚴令の布告方法は完全に憲法違反であった」と言っても，中國では憲法を守る方が珍しいので，そう言う說は現實的でない（云々)，の反論も出た。

2

この他の三人については，內容にまで入って述べる紙幅がない。それに替えて，いささか私事に入って恐縮ではあるが，私自身のコメントを轉載しておきたい。私自身の責任を明らかにし，他方，會議全體の雰圍氣を傳える役に，幾らかは役立つかもしれないからである。

二日目朝のドナルド・ドア Donald P. Dore 教授の講演（日本語）は，發表者の中では最も穩當な意見であったように感じられる。但し，途中からの聽講であったので，コメントは出來なかった。そこで，ここでは教授の經歷のみを記すに留める。教授（1929〜）はロンドン大學東洋・アフリカ研究學院卒業（專攻は日本研究)。ロンドン大學經濟・政治學院教授，サセックス大學開發研究所教授などを歷任。現在は，ロンドン大學インペリアル科學技術院の日本研究・國際比較研究產業問題研究所長。主著は Taking Japan Seriously (The Athlone Press, 1987)『イギリスの工場・日本の工場』(筑摩書房，1987)。

次のセオドア・デ＝バリ Theodore de Bary 教授（1919〜）はコロンビア大學出身。同大で博士號取得。現在は同大教授。アメリカにおける宋學研究の代表的學者であり，また，アメリカ中國學の一リーダーでもある。宋學關係の編著書は多數あるが，その中の邦譯『朱子學と自由の傳統』(平凡社，1987）はかなり評判になった問題作である。邦譯の後書きに譯者による問題點の指摘があるが，今回の發表はこの書の續きか，その要旨の發表のようであった。

講演へのコメントは，加地伸行，河田悌一兩教授が詳細にされた。要するに，發表者のテーマを否定する對論であったが，いずれ公刊の議事錄に收錄される豫定であるので，ここでは，私が會場から述べたコメントを再錄するだけにしたい。私の意見は，兩教授の對論について，別の面からセコンドするものであった。先ず，發表原稿 pp. 2–3 で言う Confucians の原語は，『史記』卷六の原文では直接には「諸侯」であり，間接には「諸生」「儒」である。しかし，この「儒」は祭祀の專門技術者・學者の意味であって，孔子の徒そのものを指すかどうかは明確ではなく，どの語にせよ，Confucians とは譯しては誤りの筈の語である。それにも拘わらず，それを資料にして Confucian Liberalism（儒教の自由）を論ずるのは，出發點から誤っているのではないか？　從って，儒教のリベラリズムの「傳統」をそのように古く，紀元前から想定するような議論は成立し難い。傳統を想定してはいない，と言うのであれば，この『史記』卷六の原文を引用した理由が判らない。〔『史記』の出典はその場では記憶で述べたのであるが，歸宅後確認した。〕

「自由」の中國的意味については加地伸行教授の解釋に盡きているが，それに關連してヴァンデルメルシュ教授が，西洋でのリベラリズムというのは，他人の意見や行動にたいする tolerance（寬容）を特徵とする旨の，有益なコメントをなされた。一方，現代の「自由」の語に相當する漢語として加地教授が引用された語は，「自任」等のようにすべて「自」が付いて，いみじくも自己中心の考えを表すのであり，換言すれば，他人への思いやり，寬容を意味するリベラリズムとは，むしろ，正反對になる概念なのである。

また，リベラリズムと中國の「自由」に關連しては，「仁」も併せて考えねばならない。一般に「仁」は人間への普遍的愛のように考えられているが，それは誤りであって，「自由」と同じように，やはり身近な者，つまり家族から遠くにおよぶ愛であり，アメリカの Derke Bodde ダーク・ボッデ教授は，氏の *Essays on Chinese Civilization* (Princeton Univ. Press, 1981, p. 399) では，「仁」を a graded love（格付けのある愛）と英譯しているほどである。つまり，中國人が重視する倫理の「仁」が，元來リベラリズムには關係していない。

要するに，中國にリベラリズムがあったとしても，思想史全體を相對的に考

察すれば，それは極く稀れに有った現象，つまり，例外であるから，中國におけるリベラリズムの「傳統」の存在などは考え難いのである———以上が私のコメントであった。

最後の講演者，李炯才 Lee Khoon Choy リー・クン・チョイ氏（1924～）は，星洲日報や *Straits Times* などの記者から1959年に政界に轉じ，エジプト，インドネシア，日本の各大使，文化，外務，首相府擔當國務相などを歴任され，現在は，UIC華米コーポレーション總支配人である。氏の駐日大使の當時，シンガポール獨立記念日には私共夫婦はいつもお招き戴いたものである。

そのような個人的親しみの感情の他に，1979年度科研費特定研究「東アジアおよび東南アジア地域における文化摩擦の研究」プロジェクトに參加して以來，シンガポールとマレーシアとの華人の宗教事情にも私は大きな關心を懷いているので，氏の發表は特に興味深かった。

氏の發表は，東南アジアの華人社會の現狀と將來とについて，概して樂天的であるように思えた。氏は，今やシンガポールでは華人やインド人と言った異民族間の區別は無くして，全住民が「シンガポール人」になりつつある，と言う。しかし，私から見れば，〔氏が報告した如くに異民族間が通婚が出來て，言語や經済などで assimilation（同化現象）が起ったにしても〕，宗教間での同化は不可能である。華人を完全にシンガポール人にさせなくしている障害，また，多民族國家間の assimilation（同化現象）を妨げている最大の障害は，私見では，宗教なのである。逆に言えば，宗教こそが，ここで問題にしている「華人意識」Chinese Identityを支える文化である。

いかに assimilation（同化現象）が進んでも，例えば，異民族間で葬儀はどうなるのか？　墓地の歸屬はどうするのか？　墓地は，土地の所有權と擴張とに繋がる社會的問題なので，輕視出來まい。シンガポールでは華人の力が強いから，華人にとっては現狀はまだ良いが，マレーシアでは bumi-putra ブミ・プトラ（土地っ子，を意味するマレー語）政策を取っていて，マレー系住民優先の政策があるので，イスラム教を優先している。漢字使用を禁止し，華人の佛教・道教を彈壓すれば，流血の慘事が起こる。現に，インドネシアでは，マレー人と華人との紛爭は絶えないではないか？　このように考えた場合，「華

人意識」Chinese Identity と assimilation（同化現象）とにおける宗教問題の處理をどうお考えか？ ———このように私は質問した。それに對しては，葬儀の場合，葬式はイスラム，埋葬は中國佛教でする例もある，と言ったようなお答えで，同化が，理想と現實でも，やはり容易ならざることを想像させられた。

以上の私の發言以外にも，勿論發言は多く，活發であった。この「東アジア比較研究」國際會議に觸發されて，參加者全員が寄稿する著作の計畫が現在進行中である。各班が三ヶ年の成果を持ち寄り，纏めれば，『叢書・アジアにおける文化摩擦』のように，學界の一つの財產が出來るであろう。

なお，本會議については，東京外國語大學國際關係論研究室內の事務局發行の『東アジア比較研究 NEWS LETTER』No 5, November 6, 1989（編集兼發行人　中嶋嶺雄）が更に詳しい。